

Yes versus No : Whether the Expectation of Desirability in Utterance Formation Is Fulfilled or Not

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6360

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Yes と No : 「＜好ましき＞の期待」の充足・非充足

河 野 武

0. 序

応答語ないしは談話標識としての yes と no (およびその変異形 yeah, nope 等) は一対で自己完結的な世界を表示する語彙項目である。これらは本質的に「肯定」と「否定」の対を表し分けるものと受け取られるが, yes/no の一見多様な機能のせいで何が肯定され, 何が否定されているのか判然としなくなっているように見える。yes/no は大きく分けて三つの領域で作用する。第一に, yes/no 疑問文への答えや同意・不同意の場合は肯定・否定は命題の真偽性判断を表す。第二に, 申し出や依頼の受諾・拒絶の場合は肯定・否定は行為遂行の有無を表す。第三に, 談話標識プロパーの類があり, 1) 会話のやり取りの操作に関わる相づち, 発話の促し, 発話ターンのかけひき, 話題の導入・変更・展開, 2) 発話表示の適切性に関わる発話スタイルの変更, 誤解の訂正, 言い直し, 強調, 引用, 主張の根拠とアイロニー, 3) さらに事態の評価に関わる正と負の表出がある。これらの錯綜した類に肯定・否定の対立を跡づけることはたやすくはない。問題の本質は明らかに yes/no の肯定・否定の対象の非等質性にある。一般的な辞書の定義では, そもそも yes/no が自己完結的な世界を成していることを示し得てはならず, 個々の意味機能が羅列されているのみで, 両語の差異が記述されているにとどまる。また, 語用論的研究 (Schegloff et al. (1977), Ameka (1992), Jucker and Smith (1998), Schegloff (2001), Lee-Goldman (2011) 等) においても, yes/no を同一機能次元上で対応させる考えはなされていないと言ってよい。

そこで, 本論文では, yes/no には肯定・否定が一貫していることを示してみたい。特に, 上記のやっかいな第三のグループについて肯定・否定がどのように介在するかを述べる。鍵になる概念は, 発話に課される様々な要件や発話の表す事態への何らかの「＜好ましき＞の期待」である。この期待が満たされていれば事柄は肯定されているものとして yes が表出され, 期待が満

たされていなければ事柄は否定とみなされ no が現れるとみなす。

1. 真偽性判断

手始めに, yes/no が真偽性判断に関わる場合から検討してみたい。これには, yes-no 疑問文への答え, 他者の考えへの同意・不同意が含まれる。次のような例がその実際である。

- (1) Are you a cat-lover? — Yes/No.
- (2) a. It was a perfect dinner, wasn't it? — Yes, it was./ No, not really.
b. The park isn't far from here? — No/Yes.

(1) は相手の想定する命題 ‘whether you are a cat-lover’ についての真偽性判断の求めに対して真偽判断を提示している。むろん真ならば yes, 偽ならば no である。(2) は相手の考えへの同意・不同意を表しており, (2a) は相手の肯定的な主張に同意する場合は yes で, 不同意は no で返答している。一方, (2b) は相手の否定的な主張に同意する場合は no で, 不同意は yes で返答している。要するに, yes/no は話し手の認定する事実が肯定的であれば yes となり, 否定的であれば no となる。相手と話し手の真偽性判断の真・偽 (つまり肯定・否定) が一致すれば, 結果として話し手は同意したことになり, 不一致であれば不同意に終わったことになる。¹

2. 発話行為の〈好ましき〉の期待の判断

発話行為の〈好ましき〉の期待が関与する場合に, 〈申し出〉や〈依頼〉の受諾・拒絶や〈許可 (の求め) 〉の承認・不承認が含まれる。次の例を見たい。

- (3) a. Would you like a drink? — Yes/No, thanks.
b. Shall I make coffee for you? — Yes, please./No, thanks.
- (4) Would you wash the dishes? — Sure yes./Sorry, no.
- (5) Can I have a look? — Yes, of course./Sorry, no.

〈申し出〉は話し手が負担を負い聞き手に利益をもたらす行為であるが,

(3b) では話し手の行為が直接表されており, (3a) では行為を受ける意向を尋ねる形になっている。(3a) での yes/no は意向があるか否かを表しており, 表面上は真偽性判断となっている。一方, (3b) の応答は相手の善意の行為の遂行を依頼したり制止したりするものである。(3b) の応答を完全な形に復元すれば, ‘Yes, please make coffee for me’ と ‘No, (please) don’t make coffee for me’ となろう。いずれにせよ, ひとまずは, <申し出>を受け入れたり断ったりすることを述べるには, 自分の意向や相手の行為の肯定的事態には yes で, 否定的事態には no で表示するとしておこう。

上の (4) は<依頼>の場合であり, 聞き手に負担を強いて話し手に利益をもたらす行為を表している。<依頼>は表面上相手が行為を遂行する意志があるかどうかを尋ねる形をとっており, 応答はその意志の有無を yes/no で表している。つまりは表面上は真偽性判断の表明である。別の視点からは, 話し手の行為の意志表明の形を借りた一種の<約束>とみなすこともできる。

例文 (5) は<許可 (の求め)>への応答であり, 話し手の行為の可能性についての問いに対して肯定か否定で答えており, ここでも表向きには真偽性判断となっている。しかし, yes/no の本当の発話意図は相手の行為の遂行を許すか否かにあることは明らかである。

以上, <申し出>, <依頼>, <許可 (の求め)>に関わる yes/no は, 表面的には真偽性判断や<依頼>・<制止>を表し, 共通する特性として肯定的事態は yes で, 否定的事態は no で表示することを見た。記述はこれで十分と思われるかもしれないが, さらに洞察を深めてみたい。改めて考えてみれば, <申し出>, <依頼>, <許可 (の求め)>は本質的にそれが相手によって受け入れられることが望まれる行為である。相手の好意を受け, 願いを聞き入れ, 自由を与えてやることは発話の当事者にとってはもちろんのこと, 高次の倫理的規範に照らし合わせても<好ましき>の期待に沿うものであると言える。このようにして, <申し出>, <依頼>, <許可 (の求め)>に関わる yes/no は, 応答がそれぞれの<好ましき>の期待を満たしていれば yes で, 満たしていなければ no で表示されるものと規定出来る。したがって, 例えば<申し出>を yes で受ける場合には, 「私の返答は (喜ばしいことに) あなたの<申し出>について想定されている<好ましき>の期待を満たすものです」といった趣旨が伝えられる。一方, no で受ける場合には, 「私の返答は (残念ながら) あなたの<申し出>について想定されている<好ましき>の期待を満たすもの

ではありません」といった趣旨が伝えられる。＜依頼＞や＜許可（の求め）＞に伴う yes/no も全く同様である。こうして、yes/no は相手の働きかけに対する応答発話の様々な次元における適切性、つまりは関連性理論で言う「関連性」の査定を根幹に持っていると言える。

3. 談話管理の＜好ましさ＞の期待の判断

会話は、ありていに言えば、参加者が共同して創る散漫な物語の寄せ集めである。会話は、互いに競い合って皆が乗れると思われる話題を持ち込み、首尾よく関心を引いた話題を可能な限り膨らませ、話題の展開が尽きたとみると新たな話題を導入するといったプロセスを反復して作り出される。参加者は語り手としてのマナーを遵守し、談話形成能力を発揮することが期待される。語り手はタイミング良く自分の語りのターンを確保すべきであり、人を押しのけたり、逆に他者との競合を過度に恐れて発話を控えたりすることは避けるのが良いであろう。また自分の語りは、すでに支配的な話題が確立されていると判断される場合にはそれを継続し、さらに展開するように心がけるべきであろう。生き生きした物語のためには話題は多様に変奏されることが望ましいが、本筋からの逸脱は避けるべきであろう。以上のことを踏まえて、会話（談話）を構成するための適切性条件として次のようなものを仮定しておきたい。

(6) 会話の適切性条件：

- I. 会話においては、発話が重ならない限り自主的かつ積極的に話題を提供すること
- II. 会話においては、特定の話題は会話の参加者によって支持される限り語り尽くすこと
- III. 会話においては、了解されていると想定される特定の話題の本筋から逸脱しないようにすること

このような会話の適切性条件は yes/no の表示に不可分な要素である。² 予想されるように、発話が問題となる適切性条件を満たしていると判断されれば yes が、満たしていないと判断されれば no が現れる。以下、適切性条件が関与する典型的な場合を検討してみたい。

3.1 発話の促し

まず、会話の成立に関わる場合から検討してみる。次の例を見てみよう。

- (7) a. Excuse me. — Yes?
b. Yes? How can I help you?

(7a) は初対面の相手に用件を伝えるための前段として相手に話しかけ、聞き手はそれを受けて用件を引き出そうとしている。話しかける側は、「適切性条件 I」を見込んで、会話の成立と用件（話題の一種）の提出を望んでおり、また相手がそれを可能にしてくれることを願っている。聞き手もそのような相手の期待に沿うことが望ましいと考えている。ここでの yes は、「適切性条件 I」が功を奏すべく相手の用件提示を促すことがここでのやり取りの＜好ましさ＞の期待を満足させるものであることを伝えるものである。このような応答は同時に丁寧さに叶うものでもある。(7b) は店員やサービス窓口の職員等がよく用いる発話であり、状況的に相手の話しかけがあったものとして先手を打って相手の用件を引き出そうとするものである。会話の図式は (7a) とまったく同一であり、したがって yes の表示も変わらない。

3.2 ターンのかげひき

会話の成立に関わるもう一つの下位類としてターンのかけひきがある。次の例を見てみたい。

- (8) No, go ahead.

上の (8) は電話等での会話の開始部分で参加者のどちらが最初に話題を切り出すか双方が迷っている状況だとしよう。どちらがターンのイニシアティブを取るかが決まらず、会話が停滞してしまっているのはどう見ても困った状況である。ここでの no は、そもそもターンが決まらず「適切性条件 I」（話題の提供）に関わる＜好ましさ＞の期待が挫かれていることの表明である。言うまでもなく、no に続く go ahead は状況の好転のために相手にターンを移譲することを伝えている。

3.3 相づち

ここまでは会話の成立に関わる応答を見て来たが、次に会話の展開部に現れる相づち (backchannel) について検討してみたい。

(9) And so I tried phoning him . . . — Yes . . . (*LDOCE*)

相づちの役割は相手の語りを支持し、存分に語りを尽くすことを促すことにある。語りの主役は明らかに相手にあるが、相手の話題を承認することで自分もささやかながら話題の展開に荷担している。このようにして、yes は、「適切性条件 II」(話題の語り尽くし)に関わる<好ましき>の期待を満たしていることの表明となる。³

相づちを打つためには、当然ながら相手の発話内容を受け取ることが前提になる。Jucker and Smith (1998) は、情報の受容を yeah (yes) の基本的な特性と見て、次のように特徴づけている。

The most frequent use of *yeah* is to acknowledge the receipt of information that is new to the discourse but consistent with currently active information. (Jucker and Smith (1998: 179))

yeah は、発話に接した時点で活性化している (つまり意識化している) 情報と一致した (矛盾しない) 新情報を受領したことを承認するものとされており、情報の受け止め態度に着目した説明になっている。しかし、ここで留まっては yeah (yes) の全貌を捉えたことにはならないであろう。本論の主張のように、情報の受容がさらに会話の展開にどのように貢献するかの視点がなければ片手落ちになることは避けられない。

3.4 話題の導入・変更・展開

ここでは、最初に、話題の導入ないしは変更に関わる応答に光を当ててみたい。次の例を参照のこと。

(10) No, to go back to what I was saying earlier, we really need to think again about this policy . . . (*COBUILD*)

上の例のような no の機能を正確に捉えるためには先行する談話セグメントが必要であるが、重要なのは no がそれまで展開されてきた話題を閉じて別の話題を提出していることである。明らかに、継続中の話題を閉じることは「適切性条件 II」（話題の語り尽くし）に抵触する。話題を十分開花させることができればこれほど愉快的ことはないであろうが、話題はいつか凋む宿命を負っている。話し手は「適切性条件 II」に関わる＜好ましき＞の期待が満たせないことを no に託して断りつつ新たな話題を提出しているのである。ここで、新たな話題とは実はすでに一度取りあげられた自分の話題であることに注意しておきたい。つまりは、no は相手への気遣いであり、話し手が自分本位の会話を望んではないことの印である。

今度は、話題の展開に作用する yes (yeah) の生態を追ってみたい。Jucker and Smith (1998) によって「先行談話ユニットの情報を一般的に承認することを表す」と特徴づけられた次の様なイタリック体で示した yeah である。

(11) A : Do you ever play tennis?

B : Yeah. . . . Every once. Well I haven't in a while, but I used to. Yeah I used to a while ago.

A : *Yeah* I like tennis.

(Jucker and Smith (1998: 180))

このような yeah が対象とする情報内容はきわめて漠然としているが、共通の話題を模索する中で投げかけた問いに相手が肯定的に応答していることを受けて、自分も共通の趣味を持つ事を明かすことで会話を広げようとしていると解釈できる。要するに, yeah は共有する (またはしうる) 話題の基盤を持ち, それを展開することは一般的な事態の観点からも会話の適切性の観点からも＜好ましき＞の期待に沿うものであることを表していると解せる。

4. 発話表示の＜好ましき＞の期待の判断

この節では、発話表示の適切性・不適切性に関わる yes/no の現象を考察する。具体的には、「ふざけ」発話から「まじめ」発話への切り替え、誤解・不一致の処理、言い直し、強調、引用、主張の根拠・アイロニーの場合を取りあげる。

4.1 「ふざけ」発話から「まじめ」発話への切り替え

会話においては、ふざけ発話からまじめ発話にスタイルを切り替える際に no が生起することが観察されている (Schegloff (2001), Lee-Goldman (2011) を参照)。次の例を見てみたい。(なお、標記は筆者が適宜変更を加えた。)

(12) Jason : I think you should demand things from him.

Sarah : (sniff)

Tracy : (laugh)

Brian : (laugh) He charges so much. Right.

Jason : (laugh) Yeah.

Brian : No, I think it's a good idea that you may well ask.

Tracy : Yeah.

(Lee-Goldman (2011: 2631))

Jason は、ここで話題となっているコンピューターソフトの作者に特別な要求を突きつけることなど無理だと知りつつ冗談半分に提案しており、Brian も同調を示しているが、すぐ後で冗談ではなく本当に要求するのが良いかもしれないと真顔で意見を述べている。この切り返しのタイミングに no が現れている訳であるが、これはどのように解釈したら良いであろうか。一般的に、話題を膨らませる過程で、興が向けばジョークに展開することは珍しくないであろう。しかし、一面で、ジョークは表現のインパクトは強いが、話題のフレーム全体の中では一時的で挿入句的なものとなりやすいとも言える。話し手はふざけを早々と畳んでまじめに転じなければならない。no は、まじめ発話がふざけ発話の興を醒ましてしまうのではないかという危惧を表していると考えられる。もっとはっきり言えば、no は、それまでのジョーク発話を継続することの＜好ましき＞の期待がまじめ発話のせいで満たせないことを表示しているのである。

ここで肝要なのは、問題となる＜好ましき＞の期待はその場の暗黙の了解となっていると話し手によって想定されていなければならないことである。そのような期待が支配的でなければ no の使用は正当化されない。単に話し手がその種の期待が関与しているのではないかと推測するだけでは十分とは言えない。もう一つ注意しておきたいのは、no はふざけからまじめにスタイル

を変更する場合に動機づけられるのであって、まじめからふざけへの変更には必要とされない。これは、まじめは発話の無標のスタイルであり、ふざけへの移行は話題のあり得る自然な展開（クライマックス）であるとみなされていることによると思われる。

4.2 誤解・不一致の処理

会話においては、話題を軌道に乗せ、できれば飽和点に達するまで話題を膨らませるように注意が払われる。その間に、会話の参加者は互いの発話内容を表意から含意に至るまで入念に理解するように心がける。しかし、実際の会話のやり取りにおいては、理解の齟齬をきたすことがままある。そのような場合を見てとった時には誤解を正し、軌道修正を図らなければならない。そこに登場するのが *no* である。次の例を見よう。（なお、標記は筆者が適宜変更を加えた。）

(13) Peter : Well, I mean, my argument here is — it's — it's — it's the

Roger : Figuring that out is what this is about.

Sarah : Yeah, yeah, no, I — I agree.

Peter : same thing as 'Plato's on the top shelf. I'm con- you know, th- that you can refer to a book of Plato by 'Plato' and you can

Sarah : Yeah. *No no*, I'm agreeing that this is a good, um

(Lee-Goldman (2011: 2635))

ここでの議論は、Peter のハンドアウトに載せたメトニミーの例が適切なものかを巡ってである。問題の例とは 'Where is the castle? How old is it? *How much does it cost?*' であり、Sarah が 'To go in, that's like.' のように補っており、it が the castle の代用形で「城の入場料」の意の純然たるメトニミーなのか、それとも省略が関わっているとみなすべきか問題を残しながら会話は進む。その間に Sarah は Peter に彼とは異なる見方をしているように受け取られているのではないかと疑心を抱く。実際には、彼女は問題の所在いかに関わらず、彼の例文は適格な例であると思っている。問題の反復的な *no* は、Peter の潜在的ないしは現前する誤解を斥けていると解釈すれば十分と思われるかもしれないが、ここでも *no* に通底する＜好ましき＞の期待が関わってい

るとしたい。Sarah にとって発話意図に反する解釈が生じてしまったことは憂慮すべき事態である。もっと真意を伝える工夫を講ずるべきであったかもしれない。誤解は発話意図を過不足なく伝える努力を(非意図的にはあれ)怠ったためであり、発話の提示に求められる〈好ましき〉の期待が満たされていない事態であると言える。no は言わば発話の不首尾への「口惜しさ」の表明である。

さらに、やや別の視点から補足すれば、誤解の処理は誠実な会話者の果たすべき重要な任務であると言える。予想外に生じた誤解を放置すれば(6)で示した「会話の適切性条件」を破る事態に陥るからである。問題の発端となった発話の話題は「適切性条件 I」(話題の提供)に従って当の発話者が提出したものであって、それを展開させるように図るのはその発話者の責務である。また、誤解は相手による「適切性条件 III」(話題の逸脱回避)への違反であって、話題を本筋に戻しておかないと会話は望まない方向に進んでしまう恐れがある。ひいては、話題が腰折れとなり、「適切性条件 II」(話題の語り尽くし)を満たさないことにも繋がる。誤解の処理はこれらの事態を避けるための方策である。

誤解は、最初の発話者の発話意図の不明瞭さが引き金になることが多い。発話者は相手が発話意図を読み違えている徴候を見て取って初めて不明瞭さに気づき、修正作業に取りかかるというのが普通の段取りである (Schegloff (1992) の Third Position Repair を参照)。発話意図の明確化は ‘I mean X’, ‘I don’t mean X’ 等の常套語句とともに発語内行為に言及する ‘I’m not V-ing’ の形式を取る。このようにして、「非難」・「不平」・「不賛成」・「依頼」・「話題の焦点」・「話題の変換」等が実は意図していたものではないことが表明されることになる。

4.3 言い直し

誤解は他者の考えの間違った表示を対象にするが、言い直し (repair) は自分の考えの不適切な表示の立て直しを意図したものである。言い直しを必要とする表現は相手によって指摘されたり確認されたりすることもあるが、圧倒的に発話者自身が気づいたものである (Schegloff et al. (1977) 参照)。次の例を見てみたい。

(14) He’s the director, no, the assistant director, of the company. (LDOCE)

とっさに口にした表現が実は厳密さを欠いていることに気づいた場合である。ここに現れる no は現象的には不適切な前言を斥けているが、より深いレベルでは、「すべからず発話が意を尽くすべきものであること」といった関連性の基本原則 (Sperber and Wilson (1986) の Presumption of Optimal Relevance) に関わる＜好ましき＞の期待に沿えなかったことの感慨を表すものである。no はこのような主観性の判断を表すものであるから、そのような発話スタンスを伴わなければ no は顕現しない。(14) は次のような形式になることも可能である。

(14') He's the director of the company. (pause) Not the director. The assistant director.

(14') はややぶっきらぼうで機械的な言い直しの感は否めないが、十分生起可能な変種である。

4.4 強調

見かけは言い直しに類似しているが、実はまったく違う方向に作用する様態として強調がある。次の例がその具現である。

(15) It took ten years — yes, ten whole years, to complete. (*LDOCE*)

ここに介在する強調は話し手の考えのコンテキスト効果（つまりはインパクト）を高めるためである。「丸十年」は「十年」と概念的意味に何ら違いはないがあえて「丸十年」と言うことで「十年」という歳月の長さを印象づけている。会話のやり取りにおいて関連性の実を上げるのは根本原則であり、発話がそのような方向で進んでいるのは喜ばしいことである。話し手は、関連性の基本原則で求められる＜好ましき＞の期待を満たしていることを yes に託して表しているのである。

4.5 引用

引用は元となる他者の発話や考えの現発話者による解釈的表示である。このような発話表示の適格性に言及する yes がある。次の例を参照のこと。

- (16) Jonny came last night. — Yes. That's what they're saying. But I must tell you, he didn't. (Bolinger (1989: 274))

(16) の最初の発話には伝達節が顕在化せず、発話の引用である直接話法とも考えの引用である間接話法とも取れる。いずれであれ、yes は相手の解釈的表示が的を射ていることを判断している。すなわち、引用発話の〈好ましき〉の期待を申し分なく満たすものであることの保証を与えている。ここで注意すべきは、問題になっているのは引用発話の表示のありかたなのであって、発話の表す事実そのものではないことである。実際、会話の締めくくり部分で引用発話の情報は誤りであることが指摘されている。

4.6 主張の根拠とアイロニー

発話の主張の根拠の適格性に関わる yes/no の応答がある。また、応答が額面通りのものかアイロニーが加わったものかによる使い分けがある。まずは額面通りの場合から検討して行く。次の例を見てみたい。

- (17) She's nearly fifty. — No, you're kidding. (*LDOCE*)

ここでは、相手が提示した話題の女性の年齢判断に対してその判断と根拠が妥当性を欠いていることを伝えている。あるいは、問題はむしろ自分にあり、単に相手の判断基準が意外で当惑していることを訴えているに過ぎないのかもしれない。いずれにせよ、少なくとも自分の判断による限り、相手の発話の適格性に求められる〈好ましき〉の期待が充足していないことになり、no が現前する。

次に、アイロニーに彩られた応答を吟味してみたい。次の例を参照のこと。

- (18) There's nothing going on between me and Jane. We're just good friends.
— Oh yes? (*LDOCE*)

ここでの応答は oh yes の形でほとんどイディオムのに使われ、上昇調のイントネーションを伴う。アイロニーは相手の考えがばかばかしいものであることを表すものである。表面的には相手の主張を支持しながら、実はその主張の

妥当性について疑義を唱える修辞である。相手の主張と根拠を共有できている事は良いことである。さらには、相手の主張を支持すること（あるいは少なくとも理由なく反対しないこと）は会話のマナーに沿うことでもある。したがって、oh yes は、あくまで見せかけにはあるが、当該の発話が主張内容とマナーの観点からの＜好ましき＞の期待を満たしていることを伝えている。なお、上昇調のイントネーションは「このアイロニー発話が＜関連性＞がある（適格で重要性を持つ）ことにあなたは気づいていますか」といった問いかけを表していると解せる（河野（2011）参照）。

5. 事態の＜好ましき＞の期待の判断

ことばは、内的世界である心は言うに及ばず、我々を取り巻く外界と不即不離の関係にある。ことばが表象する事態は、人間存在にとって恩恵を与え、幸福感をもたらすものもある。一方で、存在に脅威や障害を与え、不幸を招くものもある。このような心と外界にまたがる多様な事態は yes/no の道標で主観的に言及されることがある。次の例を見てみたい。

(19) Where's my umbrella? Oh yes — I left it in the car. (*LDOCE*)

(20) Yes! Rivaldo's scored again! (*ibid.*)

(21) Oh no, I've lost my wallet! (*ibid.*)

(22) No, Jimmy, don't touch that switch. (*ibid.*)

(19) は失念していた事を思い出す場合である。有用な情報の失念は不幸な事態であるが、記憶の回復は好ましい事態である。(20) は選手の快挙への共感の感嘆であり、一つの達成への肯定的感情が表されている。(21) は価値ある物の紛失に気づいて落胆している場合であり、ここでは明らかに否定に傾く。さらに、(22) は好ましくない事態を回避するための禁止であるが、不都合さが相手にとってか話し手（を含む人達）にとってかは状況による。なお、同じ事態であっても受け止め方は決して一様ではない。例えば、(20) では、反対チームのサポーターであれば得点の追加は明らかに好ましくない事態となり、yes は no に取って替わられなくてはならない。また、(21) と関連して、'I've lost five kilos' と発話したとすると、ダイエットを目指す人にとっては歓迎される事態であろうが、体力回復を願う人にとっては嬉しくない事態であ

ろう。yes/no はそのような事情を反映する。以上、〈好ましき〉の期待を満たす事態は yes によって、それを満たさない事態は no によって主観的に言語化されることを見た。

6. 結論

以上の議論によって、yes/no が表象する世界は次のようなものであることが明らかになった。まず、yes/no の表す肯定・否定は大きく真偽性判断と〈好ましき〉の期待の判断に二分されることである。yes/no 疑問文への答えや同意・不同意の場合はもっぱら命題の真偽性判断に関わる。申し出や依頼の受諾・拒絶の場合は真偽性判断と〈好ましき〉の期待の判断が両義的に関与する。そして、談話標識プロパーの類である、談話管理・発話表示・事態の適切性の場合には特権的に様々な状態で〈好ましき〉の期待の判断に関わる。真偽性判断は事実の客観的な認定を表すものである一方、〈好ましき〉の期待の判断は主観的な価値判断を表すものである。つまりは、〈好ましき〉の真性は人にとって「良いもの」・「悪いもの」といった評価に根ざす「快・不快」、「満足・不満足」の感情なのであった。

期せずして、yes の語源 *gese/gise* (OE) は ‘may it be so’ を表すと推定されている (ODOE)。その線に沿って考えれば、no は ‘may it be not so’ を表すものとなろう。これはとりもなおさず「そうあって欲しい」・「そうではなくあって欲しい」(=「そうあって欲しくない」)という望みを表すものであり、〈好ましき〉の感情と表裏一体をなすものである。このようにして、談話標識としての yes/no は余す所なく〈好ましき〉の主観的価値判断に回収可能となることが分かった。

さらに、yes/no は他の談話標識と共に、様々な感情的枠組みに取り込まれる。oh/ah 等に先導されれば感情への気づき・驚き・興奮等が付加され、well を伴えば関連性の不十分さが表され、さらには、heavens/hell/fuck/shit 等ののしり語に修飾されれば対象の見立てに呼応した快・不快の感情が表明される (Goffman (1981), Aijmer (1987), Bolinger (1989), Norric (2007), 河野(近刊)を参照)。yes/no の十全の役割はこのような他の感情表現とのオーケストレーションの中で発揮される。

注

- 1 yes/no 疑問文には, yes の答えを見越してさらに次の質問を畳み込んでいるものがある。言わば, 談話ユニットの前段的連続発話 (pre-sequence) に位置づけられる質問である (Yadugiri (1986) 参照)。次の例を見てみたい。(なお, 標記は筆者が適宜変更を加えた。)

i) A: Have you seen *The Brig*?

NS: Yes, I think it's one of the great masterpieces of our time.

(Yadugiri (1986: 207))

ここでの質問は, 相手の yes を見込んでさらに 'What do you think of *The Brig*?' を含んでおり, 返答は yes で表層化した質問への答え, 残りの部分は内在化した質問への答えとなっている。ここでの yes は, 第一義的にはもちろん真偽性判断の肯定であるが, 同時に相手の期待に沿った答えであること, つまり答えがここでの答えとして<好ましさ>の期待に沿うものであることを表明しているとも受け止められる。

- 2 通常の会話のやりとりにおいては, 会話の適切性条件は暗黙裏に遵守することが求められるが, もちろん必要とあらば意図的に無視することもあり得る。これは Grice の会話の協調原則と同様である。ただし, このような故意の違反は会話参加者としての否定的な評価を招くだけであろう。
- 3 Ameka (1992) によれば, 方言差や個人差は認められるが, no にも相づち機能があるという。次のような例においてである。

i) A: Fred got married to Sue last night.

B: No! [i.e. keep talking this is amazing news]

(Ameka (1992: 115 fn.))

この種の no は, 確かに実質的に相手の発話の継続を促す役割をも併せ持っているとも思われるが, 第一義的には相手の情報への<信じがたさ>を表すものとみなしたい。本論では, 後述するように, 相手の判断基準への評価 (「嘘でしょう?」の含み) ないしは事態への評価 (「それって最悪!」の含み) に関わるものと位置づける。

参考文献

- Aijmer, Karin (1987) 'Oh and Ah in English Conversation,' *Corpus Linguistics and Beyond*, ed. by E. Meijs, 61-86, Rodopi, Amsterdam.
- Ameka, Felix (1992) 'Interjections: The Universal Yet Neglected Part of Speech,' *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.
- Bolinger, Dwight (1989) *Intonation and Its Uses*, Stanford University Press, Stanford.

- Goffman, Erving (1981) *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Jucker, Andreas H. and Sara W. Smith (1998) 'And *people just you know like 'wow':* Discourse Markers as Negotiating Strategies,' *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, ed. by Andreas H. Jucker and Yael Ziv, 171-201, John Benjamins, Amsterdam.
- 河野武 (2011) 『関連性モダリティの事象: イントネーションと構文』 開拓社, 東京。
- 河野武 (近刊) 「ことばと感情: 英語の間投詞」, 高見健一他 (編) 『中島平三先生退職記念刊行物』 開拓社, 東京。
- Lee-Goldman, Russell (2011) 'No as a Discourse Marker,' *Journal of Pragmatics* 43, 2627-2649.
- Norrick, Neal R. (2007) 'Interjections as Pragmatic Markers,' *Journal of Pragmatics* 41, 866-891.
- Pearsall, Judy (ed.) (2003) *Oxford Dictionary of English*, 2nd edn, Oxford University Press, Oxford.
- Schegloff, Emanuel A. (1992) 'Repair after Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation,' *American Journal of Psychology*, 1295-1345.
- Schegloff, Emanuel A. (2001) 'Getting Serious: Joke → Serious 'No',' *Journal of Pragmatics* 33, 1947-1955.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson and Harvey Sacks (1977) 'The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation,' *Language* 53, 361-382.
- Sinclair, John (ed. in chief) (1987) *Collins COBUILD English Language Dictionary*, 3rd edn, William Collins Sons & Co Ltd, London.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- Summers, Della (dir.) (2009) *Longman Dictionary of Contemporary English*, 5th edn, Longman Group Ltd, Harlow.
- Yadugiri, M. A. (1986) 'Some Pragmatic Implications of the Use of Yes and No in Response to Yes-no Questions,' *Journal of Pragmatics* 10, 199-210.